

サノ、フクモト、マサカドがまだ人間だった頃のお話。
彼らは実は、同じ事件に関わっていたようです…。

本格ミステリーに初挑戦！！

そして、コスプレ名言塾警察官編の刑事さん、リトル学園の探偵さん達が出てきます！！

登場人物紹介

正門 (マサカド)

大阪府内の大学に通う大学4年生。就活中。下の名前が由来となり、女子学生を中心に「よしくん」と呼ばれている。インカレサークルに所属。

福本 (フクモト)

大阪府内の大学に通う大学1年生。正門と同じインカレサークルに所属しているが、大学と学年が違うため面識どころかお互い存在すら知らない。

佐野 (サノ)

兵庫在住。福本の大学の附属高校(兵庫分校)に通う高校3年生。成績優秀で大学進学の心配はいらない。趣味のネットサーフィンで今回の事件を知り、首を突っ込む。

インカレサークル

→インターカレッジサークルの略で他大学の学生と交流できるサークルのことを指す。正門達は演劇のインカレサークルに所属。

栗橋真由香

福本と同じ大学・サークルに所属する大学2年生。半年だけ付き合っていた正門の元カノ。激重系。

カオリ

正門と同じ大学・サークルに所属する大学2年生。ただのミステリー好きで今回の事件に首を突っ込む。

藤原、大橋 (from リトル学園シリーズ)

丈橋探偵事務所の私立探偵。正門からの依頼でサークルの合宿に着いていくことになる。

林、末澤、藤原 (from コスプレ名言塾警察編)

刑事さん達。無能警察だと言われてる←

敬太 (草間リチャード敬太)

今回のストーリーテラー。草間ともリチャードとも別人です。

「ここか…」

正門は辺りを警戒しながらとあるビルの中に入って行った。

丈橋探偵事務所

こないだもまた事件を解決したとかで、まあまあ評判のええ探偵事務所や。

探偵事務所なんて初めてや。

どんなもんかとドキドキしとったけど、そんなん言うてる場合やなかった。

ノックをし名前を名乗ると、陽気な茶髪の青年が出てきた。

「初めてまして！正門さんですね！！どうぞこちらに！」

「大橋、お茶」

「はいっ！！」

中にもう1人いる青年が大橋と呼ばれた青年を動かしていた。

正門は促されるまま事務所のソファに座った。

そして自己紹介してきたもう1人の彼は、藤原文一郎というらしい。

大橋がお茶を用意しソファに座ると、藤原が口を開いた。

「まず...1つ確認してええか??」

「え...??あ、...はい」

「正門さんって、バンド活動してるやろ??」

「は????」

正門は素っ頓狂な顔をしとった。

バンド活動??

正門には何のことか分からなかった。

大橋が失礼やろ、と横でツッコミを入れている。

「申し訳ないけど、俺ら、1ヶ月くらい前に自分のバンドの周り嗅ぎ回ってたからな。あんたのグループはな、グループ内で男同士が付き合って...

「丈くん、丈くんストロップ!!!!何バラしてんねん!!!!」

まだ本人かどうか分かんないやん！！と、大橋が怒っていた。

なんでも1ヶ月くらい前に、大阪市内にある浪速学園の理事長の息子の恋人調査をしたとかで。

その息子がやっているバンドに同じ正門という奴がおるらしい。

事務所に来て顔を確認してもしかして、と思った。

彼と瓜二つでそっくりらしい。

まあ、正門なんて名字珍しいから、依頼の段階で名乗っただけで疑われてはいたとかで...

(詳細はリトル学園シリーズの名探偵ジョウハシ〜理事長の息子〜まで)

「違います、人違いです！！」

正門はやや怒った状態で学生証を出し身分証明をした。

歳は同じらしいけど、下の名前が違う。

そもそもバンドグループの正門は大学生ではないらしい。

「なんなんですか、こっちは深刻な問題を抱えてるというのに。帰りますよ」

正門は怒って立ち上がった。

「すみません...、同一人物やと思って...。申し訳ございません...」

帰ろうとする正門に向かって、藤原が頭を下げた。

正門は振り返り、藤原の反省している様子をしばらく眺めた。

頭を下げ続け、十分反省していることを確認すると、正門はソファに座った。

隣で大橋がほっとしていた。

「...深刻な問題、ですか。」

藤原が頭を上げながら確認した。

わざわざ探偵に依頼をしてくるくらいや、正門は怯えているような不安そうな顔をしとった。

「...ここ1ヶ月、誰かに見られているような気がして...」

「...ストーカーですか」

大橋が正門に同情するように言葉を発した。

正門は頷くと、鞆の中から何かレポート用紙を出してきた。

人の名前と職業等、自分なりに色々調べたようや、

心当たりはあるみたいやった。

「これです、そのストーカーはおそらく彼女を振ってから...彼女を振ったのは1ヶ月前です」

レポート用紙に書かれていたのはその彼女の家族の情報。

父親と母親、兄とその彼女の4人やった。

「個人で調べてこれですか、なかなか凄いやないですか」

「別れる前にこの母親が俺に会いたい、と彼女に頼み込んだみたいです。別れる前に彼女の家に行った時に聞いた情報ですが...」

「拝借してもよろしいですか」

「どうぞ」

レポート用紙を拾い上げ藤原と大橋は内容をチェックした。

栗橋真由香、彼女が正門の半年だけ付き合った彼女らしい。

「告白されたんて付き合ったんやけど、めっちゃ重い系の彼女でした。わがまま放題やったけど、少しは我慢しとったけど、もう別れる直前は我慢出来んくて。彼女の家族に会って、別れようと決めました。ほぼ無理やり別れることに成功しましたが、その後からですね、大学の帰りとか就活で面接に行く時まで常に視線を感じる…」

正門はすっかり怯えた様子やった。

どうしてそんなに怯えているんやろうか。

振った立場なら堂々としててええ、と思うけど、そこにはこの家族に関する理由があった。

「文面だけでは伝わりにくいと思います、まずその母親」

栗橋愛華。年齢の割に見た目が若い、俗に言う美魔女らしい。

とにかく娘が可愛い過干渉タイプの母親で、正門と真由香のデート中に何度も電話をかけてきていた。

真由香も母親から自立出来ていないようで、買い物しても洋服は自分で選べないし、自分で着る服すら母親が決めるようや。

昔からそんな感じで母親中心に育ってきた真由香は母親がおらんと生きていけない、そんな感じやった。

付き合う男も昔から母親が決めてきたらしい。

初めて真由香の意思で選んだ男が正門らしい。

「会った時、美魔女すぎて色んな意味でゾッとしました。働いてばかりの父親にかなり当たり強いわがままな人でした。俺に対しては、最初こそいい男とか言って優しくったんやけど、俺が帰ってから、真由香に俺の愚痴ばかり言うてたらしいんです。自分が選ぶ男やないと、粗探しばかりするような人みたいです」

「強烈キャラすぎんかこの母親」
「こんなオカン俺嫌や」

そして働いてばかりの父親、栗橋永正(ながまさ)。

中小企業ではあるけど、俗に言う社長。
仕事ばかりで家にはほとんどおらんけど、正門が家に行った日はわざわざ仕事を休みにして待っていたらしい。

「社長の裏側を見ました、家ではほんまにダメ親父。母親に甘えてばかりでコップのひとつも片付けやしない。子供、特に女の子である真由香がとにかく可愛いみたいで、なんでも買って与えてしまう。真由香のわがママも相当です。母親以上に父親が甘えやかすから、ほんまに付き合ってた時、子供と付き合ってるようでした...」

そして最後に兄貴の栗橋真斗(まさと)

大卒でいい企業に就職したはずやけど、1年半も経たずに退職。

今はフリーターらしい。
仕事内容は家族にも言っていないとかで...

「この兄貴もまた真由香に甘い。家に行った日、俺に圧力をかけてきました。真由香が自分で選んだ男が家にまで来といて、将来の約束をしない訳がないだろう、って...。俺が妹と結婚出来ない分、お前が幸せにしろって...。彼にそう言われた時もゾッとしました...あれはどこからどう見てもシスコンです...」

強烈キャラ揃いの栗橋一家。

真由香と別れたことを根に持ちストーカーをしていると見て、間違いなさそうやった。

「けど、ストーカーしてなんになんねんって」
「他に変わったこととかないですか」

正門はここ1ヶ月の行動を思い出した。

おそらく自宅まで特定されている。

実家暮らしで他に行く先のない正門は、他の場所に家を借りて住もうとも考えとったけど、1人になったら逆に危険やと思い実家に留まっている。

就活で面接に行く時等はなるべく人目に付きやすい大通りや電車、最悪タクシー移動で襲われないようにはしているみたいや。

「このままずっとストーカーされ続けてても困るんでここに来たんです。この栗橋一家と縁を切りたい。証拠がないと警察が動いてくれんなら、探偵さんをお願いしよう、と思って...」

依頼料はこれです...、とお金が入った封筒を靴から出してきた。

厚みから推測して30以上は入っていそうやった。

「ストーカーの特定と撲滅、俺自身の護衛...、そんなところですか...??あの栗橋一家に目をつけられてしまった以上、戦うしかないな...と.....」

よろしくお願いします...、と正門は深々と頭を下げた。

「分かりました、引き受けます、任せてください」
「全力で正門さんをお守りします!!!」

「ありがとうございます...!!!」

正門はお礼の意味を込めもう一度深く頭を下げた。

藤原は大橋に耳打ちし、探偵事務所の外、入口付近に犯人が潜んでいないか確認した。

誰もおらん。

探偵事務所に入っていくところも見られてる可能性があると思うと何も気が抜けなかった。

「この父親は忙しいやろうし目立つ。この人は犯人ちゃうな...」
「母親か兄貴、まああとは真由香本人の誰かやろ。」

「それで、まだお願い事があるんですけど...」

そう言って正門はまた別の資料を鞆から出してきた。

2日後から始まるサークルの合宿で泊まるコテージのリーフレットのようにやった。

「大学最後の思い出作りにこの合宿に参加したいんやけど、残念なことに、このサークルに真由香がいるんです」

「「え」」

「おそらく彼女も参加してくる。何か仕掛けられるかもしれない。出来たら大橋さん達もこの合宿に参加して俺のことを守ってほしいです...」

そもそも真由香と出会ったのがこのサークルやった。

正門さんは4年生。就活生の為、ほとんどサークルに顔出してへんから、別れてもほっとけばええ、と思っていた。

「大橋さん達の分のコテージも用意してあります。俺の友達でサークルに入会希望の2人や、ってことでええですか。インカレサークルなんでそこまで不自然なことではないです」